

平成30年度第1回
東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会
資料収集部会

平成30年10月31日（水）
東京都江戸東京博物館 2階会議室

午前9時54分開会

藤生文化施設担当課長：それでは、本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから、平成30年度第1回「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会資料収集部会」を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部文化施設担当課長の藤生と申します。議事に入りますまで、司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、東京都生活文化局文化施設改革担当部長の工藤から御挨拶を申し上げます。

工藤文化施設改革担当部長：おはようございます。東京都の工藤でございます。一言御挨拶申し上げます。

本日は、大変お忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、まことにありがとうございます。

東京都では、各美術館、博物館の設置目的にのっとりまして、すぐれた芸術作品や歴史的資料の継承、東京の芸術文化や歴史の内外への発信などを進めるため、それぞれ収集方針を定めまして、計画的に収蔵品を購入しているところでございます。

そうした観点から、本日の収蔵委員会におきましては、769点の作品について、当館に所蔵する資料として妥当であるかどうか、委員の皆様の専門的な見地から御審議をいただければと存じます。

この江戸東京博物館ですが、常設展だけで年間約100万人のお客様を迎えているような状況でございます。そのうち2割程度が海外からのお客様ということでございます。昨年度後半は施設改修のため、全館休館しておりましたが、ことし4月から特別展示室など一部を除きまして再オープンしているところでございます。おかげさまで常設展への来館者数も順調に推移してございます。さらに安心で、快適な施設といたしまして、また、収蔵品もさらに充実することによりまして、2020年のオリンピック・パラリンピック大会や、それ以降も見据えながら江戸東京の魅力を国内外へ強く発信していきたいと考えております。

本日は、何とぞよろしくお願いいたします。

藤生文化施設担当課長：続きまして、東京都江戸東京博物館館長の藤森から御挨拶を申し上げます。

藤森館長：藤森でございます。

収蔵委員会は、回によっていろいろ波があるのですけれども、きょうは幾つか楽しみものがありますので、よろしく御審議をお願いいたします。

藤生文化施設担当課長：次に、本日御出席いただいております委員の皆様を御紹介させていただきます。

私の向かって左の席から順に御紹介をさせていただきます。

大口委員でございます。

松尾委員でございます。

神谷委員でございます。

山梨委員でございます。

小島委員でございます。

武田委員でございます。

中村委員でございます。

金子委員でございます。

なお、常任委員の根崎委員については、事前に御欠席との御連絡をいただいております。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都江戸東京博物館事業企画課長の飯塚でございます。

それでは、これから議事に入りたいと思いますが、まずは、委員長を選任したいと思います。

当部会の委員長は、委員の方々の互選で定めることとなっております。委員長の選任をお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

お願いします。

松尾委員：委員長も、副委員長も昨年度と同じで、大口先生と金子先生でよろしいかと思えます。

藤生文化施設担当課長：ただいま昨年度と同じということで、委員長を大口委員、副委員長を金子委員ということで御推薦いただきましたが、ほかに御意見はございませんでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

藤生文化施設担当課長：それでは、委員長を大口委員、副委員長を金子委員をお願いいたします。

大口委員、金子委員、どうぞ席をお移りください。

（大口委員、委員長席へ移動）

（金子委員、副委員長席へ移動）

藤生文化施設担当課長：それでは、委員長に進行をお願いする前に、当部会の公開について説明させていただきます。

当部会は「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会設置要綱」第12の規定により原則公開となっております。そのため、委員皆様のお名前と現職名は東京都のホームページ上にて公開しております。しかし、議事内容の公開につきましては、資料収集決定前の審議の段階で対象資料の詳細を公開することが現在の資料所有者の方に不利益を生じさせるおそれがあること、また、本日実見する資料の実物は、あくまでも審議の参考用に所有者から借用している段階であることから、事務局といたしましては、昨年度の資料収集部会と同様、委員の皆様にお諮りした上で、本日の段階では冒頭のみ公開し、議事内容は後日議事録により公開することが適当と考えます。

なお、当部会の議事録の公開に当たっては、委員の皆様事前に確認をさせていただき、その上で公開したいと思います。

非公開にするには、要綱第12の第1項（2）及び第2項（2）の規定によりまして、部会での決定が必要になりますので、今回についても皆様でお諮りいただければと思っています。

それでは、大口委員長、金子副委員長、議事の進行につきまして、よろしく願いいたします。

大口委員長：大口でございます。

昨年同様ということで、引き続き司会をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、今お話がありましたように、今年度の資料収集部会の公開の是非について、最初にお諮りしたいと思います。

ただいま事務局から説明がありましたように、ここから後の議事内容については、昨年同様非公開が適当だという意見でございました。いかがでしょうか。委員の皆様から何か御意見があれば伺います。

小島委員：異議ございません。

大口委員長：特に異議がなければ、ここから後の議事内容は非公開ということにさせていただきます。後日議事録を公開するということにしたいと思います。よろしくお願いいたします。

では、早速議事に入りたいと思います。

まず、事務局から今年度の資料の収集方針と、本日審議いたします収集予定資料の説明をお願いします。

飯塚事業企画課長：説明の前に、お手元の資料の確認をお願いいたします。

まず、一番上に会議次第がございます。

資料1としまして、委員名簿がA4で1枚ございます。

資料2の収蔵委員会設置要綱がA4で2枚ございます。

資料3、「東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針」が1枚ございます。

資料4「平成30年度東京都江戸東京博物館における収蔵品購入に関する方針について」が、A4で1枚ございます。

資料5「平成30年度第1回資料収蔵委員会（収集部会）説明資料」がA4で2枚ございます。

資料6、こちらはA3の横版でございますが、「平成30年度 第1回 資料収蔵委員会付議資料」がございます。こちらは1～27までナンバリングしている資料でございます。

なお、お配りしました名簿に誤りがございましたらば、恐れ入りますが、後ほど事務局へ御連絡いただければと存じます。お手元の資料につきましては、現時点では未公開の情報が含まれておりますので、会議終了後回収させていただきたく存じます。また、白い封筒に現在開催中の企画展「企画展 玉—古代を彩る至宝」の御案内と招待券が入っております。

ます。会議終了後、お時間がございましたら、企画展のほうをぜひごらんいただければ幸いです。

それでは、今年度の資料の収集方針を御説明いたします。

A4版の資料3をごらんください。本資料にございますように「東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針」にのっとりまして、当館の展示及び研究に供する資料を収集する方針をとっております。

資料4をごらんください。こちらの資料は、平成30年度の収蔵品購入に関する方針について記載してございます。今回は、この中でも特に2つの項目に重点を置き、資料の収集を図りたいと考えております。

第1に、方針の2に基づきまして、江戸東京の歴史と文化の魅力を国内外に発信できる資料でございます。

第2に、方針3（1）に基づき、常設展や当館の性格に合致した継続的事業に繰り返しかすことが可能な事業でございます。

今回御審議いただく資料について説明いたします。A3サイズ横版の資料6をごらんください。今回は委員の皆様へに審議していただく案件としまして、購入を予定している資料がございます。資料の内容はこの後詳しく御説明いたします。

それでは、資料6を2枚おめくりください。3枚目の紙の右下に1とナンバリングがございます。このページが今回の付議資料の総括表でございます。付議資料の点数は、購入資料が769点でございます。

購入資料の内訳は、標本資料が735点、映像音響資料が34点でございます。分類別では、標本資料のうち絵画が2点、工芸品が6点、生活民俗が20点、典籍が12点、文書類が62点、印刷物が633点でございます。映像音響資料は、静止画が34点でございます。

この後のページに、購入資料の入手先別と分類別の点数を一覧表にしてございますので、御参照いただければと思います。

主立った資料について、資料ごとに個別に御説明いたします。

A4縦版の資料5をごらんください。また、先ほどごらんいただきましたA3横版の資料6の4ページ以降に資料リストを記載しております。その表の左端に「No.」と書いてある5ケタの番号が説明番号になりますので、あわせて御参照いただければと存じます。

資料の説明をいたします。

1番目が《隅田川窯場図屏風》で、説明番号は資料6のリストの4ページのNo. 1でございます。

この作品は、酒井抱一による江戸後期の作で、江戸郊外の名所として親しまれました隅田川上流のひなびた風景を描いた、六曲一双の屏風です。右隻に今戸の瓦焼きの窯、左隻に隅田川とその対岸の風景を描いています。この作品は、幕末期に編まれた『抱一画譜』に写しがおさめられていることから、抱一の真筆であることがわかります。

酒井抱一（1761～1828年）は、尾形光琳の弟で、陶芸家であった尾形乾山の墓を整備し、

『乾山遺墨』を刊行するなど顕彰活動を行いました。抱一自身もみずから4世乾山を継承して作陶をたしなみ、佐原菊塙が創始した「隅田川焼」を支援したといえます。

隅田川沿岸の今戸地区は、かつて江戸東京の一台窯業地であり、瓦や生活雑器・茶器などの生産を通じて、江戸の市民の生活を支えていました。当館が収蔵する今戸焼関係資料は有数のコレクションとなっています。

本作は、江戸人が愛した隅田川の風景と産業の姿を描いた絵画資料として、当館のコレクションにふさわしいものです。常設展示「江戸の美」を初めとし、さまざまな企画で活用することができると考えております。

続きまして、2番目の《浮世美人寄花 笠森の婦人 卯花》で、説明番号は資料6のリストの4ページのNo. 2でございます。

この作品は、鈴木春信による明和5年（1768年）から明和6年（1769年）ごろのものです。

鈴木春信（1725?～1770年）は、錦絵の創始期に活躍した浮世絵師です。春信の錦絵は明和期の初めに裕福な趣味人の間で流行した絵暦交換会で誕生しました。明和5年（1768年）ごろから江戸市井の実在の美人を題材とし、錦絵を大衆に普及させていきました。

「浮世美人寄花」は、江戸で評判の美人を花になぞらえ、その花を詠んだ和歌を添えて描いた春信晩年のシリーズです。この《卯花》では、谷中笠森稲荷の水茶屋「鍵屋」の娘のお仙を取り上げています。お仙をあらわす記号としまして、朱色の鳥居、縁台の上の茶棚、団子、蔦の紋などが描かれています。さらに縁台の上の手紙には「おせん」の文字が見えます。画面向かって右に描かれている茶を運ぶすらりとした美人がお仙です。当館では、お仙と並び称された美人、浅草寺境内の楊枝屋「本柳屋」の娘のお藤を描いた《浮世美人寄花 楊枝屋婦 菫菜》を所蔵しています。本資料を収集すると、同シリーズの2人のライバルが揃うことになります。

《卯花》は、色・刷りの異なる作品がボストン美術館のビグロー・コレクションにあるのみで、残存数の少ない極めて珍しい作品です。常設展示「江戸の美」などで活用できる貴重な錦絵でございます。

「3. 漆工及び金工」について、御説明いたします。

説明番号は、資料6のリストの4ページのNo. 3～7でございます。

今回、徳川家にゆかりのある大名道具5件を収集候補としております。

《村梨子地葵浮線菊紋散牡丹唐草蒔絵耳盥》は、徳川家の三葉葵紋と閑院宮家の浮線菊紋が散りばめられています。両家紋から、徳川家一門と閑院宮家との間で婚姻した姫君の調度品であることがわかります。両家の縁組例は歴史上3例あります。第11代将軍徳川家治の御台所となった倫子女王（心観院）と、御三卿田安家3代齊匡の正室貞子女王、そして、同家5代慶頼の継室であった佳子女王です。本作品は、3人のいずれかの道具であったと考えられます。

《葵浮線菊紋付松竹鶴亀文様合柄鏡》も一連の道具と考えられ、2枚の合わせ鏡に鏡建

が揃っています。

《村梨子地葵葉菊紋散花桐唐草蒔絵耳盥》及び《葵葉菊紋付花桐唐草文様茶碗并茶碗台》は、第14代将軍徳川家茂の御台所和宮親子内親王（静寛院宮）の所用品です。当館には、和宮の調度品としてお歯黒道具、眉作り箱、櫛台などが収蔵されていますが、本作品を収集することによって、それらをさらに充実させることができると考えています。

《村梨子地葵紋散牡丹唐草蒔絵広蓋》は、家紋が三葉葵紋のみであることから、徳川家の実家である場合か、あるいは一門内での婚礼の際に制作された調度と考えられます。

これらは、華麗な大名道具の一つとして、常設展示「武家の文化」や特別展・企画展などで大いに活用することができます。

「4. 鏝 蓮図」について説明いたします。

説明番号は、資料6のリストの4ページのNo. 8でございます。

これは、府川一則（初代）による江戸末期の作です。

府川一則（初代 1824～1876年）は江戸の彫金師でした。晩年の葛飾北斎に入門し、絵師として活躍しますが、北斎の死後、徳川将軍家の刀装具を代々手がけた後藤家の門流に師事し、彫金の道に転じました。

当館では、府川家から寄贈された初代と3代の注文帳や書簡、下絵、道具類などの関連資料約600点を収蔵しています。文久元年（1861年）の注文帳には、3月20日に本作の発注を控えたと推測される記述が確認されます。さらなる検証が必要ではありますが、文献資料と対応する希少な作品の可能性があり、注目されます。

常設展の「武家の文化」「江戸の美」などのコーナーでの活用が見込まれる資料です。

「5. 古文書」について説明いたします。

説明番号は、資料6のリストの5ページ、No. 40～42でございます。

江戸後期の幕府関係資料3件を収集候補としております。

《赤坂喰違より水道橋まで仮御番所并々切矢来場所絵図》です。これは、長い全体図と14枚の部分図から成る絵図になります。ほかに1枚、別資料から混入したものも含んでおります。赤坂喰違から水道橋に至る外堀に沿う道筋で、橋など通行の要所に設ける仮番所や竹矢来の設置場所と仕様が詳細に記されています。部分絵図には「御作事方」あるいは「小普請方」の付け札がついています。幕府が重要行事を実施する際の警備体制を準備するための設営図面である可能性が考えられます。

2件目は、《監察勤方早引》（仮題）でございます。職務にかかわるキーワードを語順別に見出しをつけて検索する早引き書の形式をとっています。職務上のしきたりや書き物の仕様と回覧・保存の要領、徒目付への指揮要領などで、その内容から、幕府目付の便覧であったものと推測されます。

3件目は、《ハリス・ヒュースケン登城の図及登城次第》です。これは安政4年（1857年）に行われた、アメリカ領事ハリスの江戸登城を描いた絵と登城の次第を記した資料です。同様の絵は、黒船館所蔵《安政四年亜米利加使節ハリス登城の図》が有名ですが、本

資料のほかには、これと同じ写本を確認することはできません。

この3件は、いずれも幕府による江戸の治政を知る上での貴重な資料であり、常設展示「総城下町江戸」などでの活用が見込まれます。

最後に「6. 関東大震災コレクション」について御説明いたします。

標本資料と映像音響資料がございまして、標本資料の説明番号は資料6のリストの4～24ページのNo. 9～39及び43～602でございます。また、映像音響資料の説明資料は27ページのNo. 1～5でございます。

これは、大正12年（1923年）9月1日に発生した関東大震災に関するさまざまな資料を集めたコレクション群です。収集者は震災当時から東京府中野町に住んでいた個人と見られ、震災発生後、間もなく収集を開始したものと思われまます。古書店での購入のほか、収集者の知人と見られる浅草区役所の職員から送られた資料もあり、収集ルートを知る手がかりとなります。

コレクションの内訳でございますが、震災当時に軍や行政機関が配布した文書類及び震災発生時と1周年・2周年に発行された各種新聞などがあります。中でも注目されるのは、当時配布されたポスターやビラ類で、種類が多く貴重なものが少なくありません。また、震災直後の東京の被災状況を撮影した航空写真は、ほかに類を見ない貴重な資料です。

常設展示「関東大震災」での展示のほか、2023年に発生100年を迎える関東大震災をテーマにした展覧会などでの活用も期待できます。

なお、このコレクションは図書資料も含まれております。図書資料につきましては、例年どおり第2回の収蔵委員会で御報告したいと考えております。

説明は以上でございます。

大口委員長：ありがとうございます。

それでは、今の御説明で委員のほうから質問があれば伺います。

特になければ、例年どおり別室に収集予定の資料が展示してありますので、これから資料を実際に見て、また後で御意見を伺いたいと思います。よろしく申し上げます。

（委員離席）

（資料実見）

（委員着席）

大口委員長：それでは、議事を再開させていただきます。

皆さん、資料をごらんになって、御意見、御感想あるいは質問がありましたら出していきたいと思いますが、今回は松尾先生から回っていくということでお願いします。

松尾委員：まず、大変興味深い資料がたくさん集められていて、本当に興味深く見せていただきました。

《隅田川窯場図屏風》という酒井抱一の絵は屏風絵でなかなか迫力があって、今戸の瓦焼きの窯が大きく描かれているというのが何ととっても珍しいものだなと思いました。そこには、働いている人の絵も描かれておりますし、対岸が全くまだまだ寂しいのだなとい

うこともわかりますし、酒井抱一は姫路の酒井家の当主の弟で大名の一門なのですけれども、このような庶民の働く場に注目して、こうした大きな屏風を仕立てるといいますか、屏風を仕立てたのが誰なのかはわかりませんが、本当に迫力のある、興味深い、珍しい屏風絵だと思いました。

学芸員の方からお話を伺った徳川家ゆかりの大名道具ですが、三葉葵と菊の模様とで誰の婚礼の時の調度かということがわかるもので、三葉葵が三色になっている珍しいお道具もあって、どれもみんなすばらしいもので、和宮の調度品もあり、これから展示で多くの方の目を引くものではないかと思います。

それから、あとは古文書が3点でしたけれども、それぞれ興味深いもので、まず目付の勤方のものですが、「監察勤方早引」というタイトルがついておりますが、これは表紙を見ますと「徳川時代 大奥の礼法」と書いてありましたけれども、中身は全く違って、幕府の監察官である目付が部下にいろいろと指示する。そうした内容のもので、すぐれた資料的価値があると思いました。

その前の《赤坂喰違より水道橋まで仮御番所并メ切矢来場所絵図》という資料は、天保の12代将軍家慶の日光社参の時に、留守になる江戸をどういうふうに警備するか、あるいは将軍が江戸城から日光の方へ行くときにどういうところを警備するか、防衛するかということがよくわかる資料で、具体的に日光社参のときの江戸の守りというのはどうであったのか。時代によっても変化があると思いますけれども、12代将軍の天保期の日光社参時の様子がよくわかる。大変興味深い資料だと思いました。

《ハリス・ヒューズケン登城の図及登城次第》はハリスの江戸登城を描いた絵で、これまでも知られているものですが、それとはまた違った趣の文字の説明が入ったもので、これはこれでよい資料ではないかと思いました。

あとの「関東大震災コレクション」ですけれども、大きな文字で印刷されているポスターなどがたくさんあって、震災で多くの被害があったと思うのですけれども、あれだけのものを印刷物にして配布するというシステムといたしましうか経路、これも考えるべきことではないかなと思いましたが、余りゆっくり見る暇がありませんでした。この収集者は江戸期の資料も収集されていたようで、それもあわせていずれ見ることができればと思いました。どれもそれぞれ研究に、展示に役に立つよい資料であると思いました。

以上でございます。

大口委員長：ありがとうございました。

それでは、神谷先生、お願いします。

神谷委員：面白いものがたくさんあって、見切れなかったのですけれども、抱一の屏風は、抱一にしては非常に珍しい略画で、水墨画というのはなくはないのですが、水墨画でも非常に丁寧かなと思うのですけれども、略画で珍しいものですが、右の方にまだ枝のついた薪の積んであるところなどは、非常にピュアないい感じを持ちました。

出品歴もあるようですので、知られてはいたようですけれども、とてもすばらしい、非

常に珍しい屏風ということではないかなと思います。あとは、こちらは博物館としては、タイトルが《隅田川窯場図屏風》と書いてある。今戸かどうかを徹底的に調べていただくと面白いかなと思います。作品としては問題ないと思いますし、使い道もあると思います。

春信のものですけれども、展示できるクオリティーのものが出てくるというのは非常にありがたいことで、春信の作品というのは本当に数が少ない。東博あるいは海外のコレクションに比べると、多少文字とかすれているところがありますけれども、展示できるクオリティーのものが出てきたというのは非常にありがたいなと思いますし、お藤と並んで展示ができるというのが何よりうれしいなと思います。錦絵というのはまさに江戸らしくなってくるころのものですので、ぜひとも収集して、活用していただきたいと思います。

工芸品はささっと見ました。鏝もおもしろいなと思って見ました。

あと、「関東大震災コレクション」がなかなか手応えのあるものだなと思いました。あれだけの数のものも、ひたすら集めなければと思って集めたのだろうと思いますけれども、オリジナルのものがそれぞれで誰が何の目的でつくったのかというのをきちんと調べていくと、活用の価値があるのではないかな。

今日の防災のためにも非常に役に立つものがたくさんあるような気がしますので、私も名古屋市博物館では、来年が伊勢湾台風60年で、私も5歳のときで記憶があるのですが、もう知っている人がいなくなってしまうのでこの際にやろうと。ただ、物がほとんどないです。高潮の被害が一番ひどかったのですけれども、高潮でさらわれてしまって、物がなくな中でどうやって展覧会をやるのかと。展覧会そのものは江戸時代の木曾三川の治水、洪水から始まって、最近では東北の震災などを取り上げますけれども、そういう中で物が出てきたというのは、大変博物館としてはありがたい、使えるもので、ちょっとうらやましい気がいたしました。

例えば航空写真でも誰が撮ったのかとか、それがわからないかもしれませんが、調べていくとまた面白いものが出てくるかなと思います。

今回は、総合歴史博物館らしいいろいろなものができて、さらなる充実したコレクションになるなという気がいたしました。

以上です。

大口委員長：ありがとうございました。

山梨先生、お願いします。

山梨委員：抱一の屏風でございますけれども、先に御指摘もあるように珍しいものだと思います。江戸琳派を始めました抱一というのは武家でもございましたし、こういった労働的な部分というのを描いたものは珍しいと思いますのと、向かって右側の左隻のほうですけれども、略画的というか、割に大きな筆遣いで描いているという部分も珍しいものとして見ました。

既に江戸琳派展に出品歴もあるということですのでけれども、モチーフが今戸の瓦焼きの窯

場であるということなので、こちらにふさわしいものかなと考えます。ただ、双幅になってございますけれども、その関係性であるとか、さらに研究が必要な部分があるかなと思いました。

春信のものは、錦絵の中で春信は非常に重要な存在ですけれども、作品が少ない中で非常に有名な笠森のお仙のところを描いているというところで、こちらの収集にふさわしいものと思います。文字部分などでちょっと擦れもございますけれども状態のいいもので、ぜひお藤との関係もございますので収集していただければと思います。

漆工品は、本当に状態もとてもいいものですし、徳川家との関係、公家家との関係というものもよく紋所からわかるもので、貴重なものと思いますし、展示映えもするものと考えます。収集にふさわしいと考えました。

鍔ですけれども、これはループルですとか、海外の美術館、博物館にも日本の金工品の優品としてコレクションが大変たくさんあるもので、海外の方がお喜びになるものと思います。状態も非常にいいもので、細工も緻密ないいものだと思いましたが、御説明にございましたように、もしかすると、その制作背景を明かすのではないかという文書も御所蔵ということですので、こちらで所蔵して、さらに研究を進められるという意味でも、収集にふさわしいものと思いました。

関東大震災のものは、最近非常に災害も増えておりまして、日本は災害国で、それを何度も乗り越えてきたということが海外でも知られておりますし、レジリエンスというのですか、復興の速やかさというところも注目されているところですので、こういったもので帝都復興にみんなが一生懸命になっていたということが物として伝わってくる資料でしたので、こちらで収集して、また、展示をして、多くの方たちに帝都直下の地震というものの状況に対して、学び、備えていただくというのも重要なものかなと思いました。

あとは、ハリス・ヒューズケンですけれども、幕末、明治になりますと、絵画というものの記録性が注目されてくるところで、もちろん歴史資料としても重要なのですけれども、絵画資料の記録的な描写というのがだんだん際立ってくるという意味でも、貴重なものかと思いました。

以上でございます。

大口委員長：ありがとうございました。

私も一言申しますと、特に歴史の古文書のところで思いついたことを申します。

先ほど、松尾委員からも御説明がありましたけれども、古文書の中のNo. 40の《赤坂喰違より水道橋まで仮御番所并々切矢来場所絵図》というものがありません。あれは担当員の方の説明を伺っていると、天保14年に将軍が日光社参に行きますけれども、その時の江戸の警備の図だということでありまして、日光社参につきましては、江戸幕府の政治的な意味でも研究がありますし、特に江戸を出て、日光までの道中、各宿場を延々と大名を引き連れて、将軍が日光まで行くわけですけれども、そのための馬の用意であるとか、宿場の用意という点については、かなり最近研究が出ているようですが、江戸の中でどうやった

のかというのは、これまでほとんどわからなかったと思うのですが、そこはかなり具体的な道と竹矢来を引いて、警備をするという具体性が出てきたので、これは研究すればおもしろいし、同時に江戸の地図の上に載せていけば、展示資料としても大いに役に立つものではないかと思いました。

今日のものでは、一番大きいのは関東大震災の資料ですが、考えてみると、関東大震災というのはもう100年近くなりつつあるということで、もちろん関東大震災を経験した人はこの中にはいないわけです。私は母親が女学校1年で東京の芝に住んでいまして、地震に遭って、火災に遭って、逃げて、その日の夜は増上寺の門のところで、親子で一晩過ごしたという話を幼いときに何度か聞かされました。母親は昭和10年代、昭和20年代になっても、ちょっと夜中でも地震があるとぱっと庭へ飛び出すという習慣をして、子供たちは笑っていたのですけれども、東日本の震災などを見ていると、母親の気持ちがわかるという感じをしていました。

そういう経験を積んでいたせいなのか、私の家は本当に庶民の家ですけれども、関東大震災のグラビアというのかしら、新聞社の編集したグラビア誌みたいなものが何点かありまして、子供時代にそれを見ていた。

しかし、そういうコレクションも、大学生になるころには、もう我が家から消えておりまして、処分してしまっているのです。これだけのコレクションをこつこつとため込んで、今日まで持ち続けて、しかも、運よく江戸博に引き継いだということは貴重な資料だと思うので、こういうものは江戸博で収集品として展示されれば、これを見て、これならうちにもあるというものも、今後出てくるのではないかと思います、大変なコレクションだと思いました。

この中で、今日は表に出ていませんでしたけれども、関東大震災に関連して、江戸の安政の大地震の資料が何点かありました。それも割と残っているものだと思いますけれども、当然関東大震災の展示のときには、そういうものも一度整理して、まとめてみると関連がわかるのではないかと。災害の経験が引き継がれていたかどうかという点からも意味があるかと思います。

私からはそのぐらいです。

それでは、金子先生。

金子副委員長： まず、婚礼調度を拝見したわけですが、先ほど斎藤学芸員とお話をしていたら広蓋は少し時代がさかのぼるのではないかと。全体に江戸後期、幕末の婚礼調度の特徴を備えていて、本当にこの博物館の展示には、まことにふさわしいものだなと思いましたけれども、この広蓋だけは作風が少し違って、特に三葉葵紋が3つに三葉葵で分かれているわけですが、金蒔絵と金平文、銀平文と3種類に描き分けているのです。そういう意味では、あの中では高級品といいますか、少し手が込んでいる。金平文かどうかはもうちょっと精査しないといけないと思います。箔ほど薄くないけれども、恐らく蒔絵と金と銀の薄い板です。その上に葉脈を蒔絵であらわしているというなかなか凝ったも

のだなと思いました。

やはり、抱一の窯場の絵はすごく興味を持ったのですけれども、明治になると隅田川焼というのが結構大きく広がって行って、井上良斎という人を中心に隅田川焼が、最近よく話題になる宮川香山のいわゆる超絶技巧という言葉が最近よく言われますが、あれよりもっと超絶技巧な、ものすごく、ある意味ではどぎついといいますか、そういう焼き物に発展していくのですけれども、お話を伺ったらこのころは、本当に趣味の焼き物みたいなものだったということなのですが、それと今戸焼の関係というのを私は余りよく知らないなので、非常に興味を持って、これからもうちょっといろいろ明治との関連がわかっていけばいいのかなと。

あの窯の形は何とおっしゃいましたか。

事務局： だるま窯です。

金子副委員長：だるま窯というのですね。

だるま窯の全体に、画面に向かって左から右にかけてすうっと大きくなっていくようなとてもおもしろい構図、一番大きなところに松葉がだあっと積んであって、恐らく瓦ですから松葉を燻して、不完全燃焼させると煤が出てきて、それが土、粒子に入って行って黒くなるわけですね。そんなことがよく描かれているので、私らから言わせると焼き物の資料で、そういうのを使って展覧会に出せばいいなという、すごくおもしろいものだなと思いました。

府川一則という人を私は余りよく知らないのですけれども、なかなか立派な鏝の作例だったなと思います。文献資料600点がこちらにあるということで、それと発注の文書に関しては余りよく見る時間がなかったのですけれども、茨城県にも水戸金工というものがありまして、幕末、明治になると廃刀令で食えなくなるのでみんな江戸に出てきて、そこから皇室技芸員とか人間国宝が出てくる。水戸でやってくれば茨城県の間人国宝になったのですけれども東京へ出てしまったので、でも、水戸金工という名前はずっと使うのですよ。

最近、海野勝眠という中心人物に個人が注文して、その注文によって制作したという注文した方の個人に資料が残ってしまっていて、注文する方が図案まで指定して、それで作って、もちろんプロですから図案はいろいろ手を入れるのでしょうけれども、それで作ったという記録が出てきたので、その発注の仕方、制作の仕方、注文の仕方みたいなものと何か比較をすれば、江戸と明治の初めぐらいの物の違いがよく出てくるのではないかなという気がして、とてもこの鏝には感心いたしました。

それから、大震災の中で禁酒のポスターが一番印象的で、ほかにももう2点ぐらいあるようですけれども「帝都振興の第一歩は禁酒にあり」と。夏前にぐあいが悪くなって2カ月ぐらい禁酒しましたらやはり体調がよくて、腹も引っ込んで、復活した途端に腹は戻ってしまいましたけれども、確かに禁酒というのはすごい威力があるなと思ったので、そういう意味で今日はポスターを見てなるほどなど。すごいいいポスターだなと思いました。

先ほど、ちょっとお話しさせていただいたのですけれども、「祖父の江戸、父の東京、

僕の大東京」という丸い、これはポスターと書いてありましたが、あれは恐らくめんこではないかと思ったのですけれども、私らが少年時代にもあんな大きくて、薄いめんこが一番安いのですよ。薄いけれども大きなめんこは風が起きるので、安いめんこで小さくてかっちりした高いめんこを獲得するという必殺技でやっていた。そんな気がしましたけれども、ちょっとわかりませんが、僕の東京ですから子供が中心になっているので、そんな気もしないでもなかったという意味で、震災のものですから楽しませていただいたというのも何ですけれども、とても興味深く拝見させていただきました。

それぞれとてもこの館にふさわしいものだなと思いましたので、話させていただきました。

以上です。

大口委員長：ありがとうございました。

では、小島先生、お願いします。

小島委員：どれもテーマ的にも、物としても、とてもよいもので、この館の収集にふさわしいものかなと思って拝見いたしました。

幾つか関心を持ったものについて少しコメントいたしますと、まず酒井抱一の《隅田川窯場図屏風》ですけれども、こちらの館に今戸焼という実際の製品のコレクションもあるということで、それとあわせて展示すると非常に効果も高いと思われますし、技術的な面で実際の焼き方ですとか、どういう燃料を使ったといったところがわかるというのも大変貴重ではないかと思えます。

そういう江戸の地域史の資料としてと、もう一つは絵画としても非常に興味深いところがあると私は思っていて、一つ思い出したのが鋏形蕙斎の《近世職人尽絵詞》という東博がお持ちのものがあって、最近影印本を出したところなのですけれども、そういった職人図の系譜の中で考えても非常にこれはおもしろい、重要な作品ではないかと思えます。鋏形蕙斎だと、ちょうど酒井抱一は同時代だと思いますし、19世紀の初めごろに江戸の職人を描くという一連の絵画がつくられたということの意味というのが、歴史的に面白いところがあるのではないかなと思えます。もっとさかのぼると、喜多院にあります職人絵などもありますけれども、そういった職人絵の系譜の上でも考えられると思えます。

もう一つ面白いのは一雙なのですよね。右隻、左隻の両方がある、今戸焼の窯だけではなくて、もう一つの隻の方には隅田川の情景とか筑波山が描かれている。職人絵の中にも最初からこういう屋外の風景が描かれているところがあって、大げさに言うと、洛中洛外図屏風の、そういった絵の系譜を引いている面が恐らくあるのではないかと思うのです。これも窯だけを描いたのではなくて、その窯に伴う周辺の景色、さらにはもっと遠くの筑波山ですとか隅田川の都鳥を描いた絵です。

私が非常に面白いなと思ったのは、むしろ旗を立てた非常に粗末な帆かけ船がそこに描かれているのですけれども、積み荷が米俵と恐らく薪か炭なのです。ですから、食料と燃料を外から持ち込まないといけないというのが都市という場の一つの特徴なので、これは

食料や燃料がどんどん入ってくるというのは、その都市が繁栄しているということの証なので、そういったところで江戸という都市の繁栄をたたえる絵という意味も恐らくあるのではないかなとちょっと思いました。

千葉県というのは結構江戸に向けて燃料を輸出というのでしょうか、運び出すところなので、千葉の方から来たのかなとちょっと思ったりしましたがけれども、そういう周辺とか後背地の問題まで描き込まれていて、やはり一種の都市をたたえる絵だと思うのですが、そういう性格の絵としても評価ができる面白い作品ではないかなと思いました。

古文書の方で、番所并々切矢来場所絵図というものがあって、これもなかなか面白い資料で、こちらの館で系統的に収集していらっしゃる江戸の地図、絵図のコレクションの1つとして非常に重要なものだろうと思いますし、もう一つは警備の絵といった一つのジャンルがあるのだと思います。当館にも京都のものなのですが、たしか院が外出するときの警備の様子、やはり道の中に主線を引いて、どこにどういう施設をつくるということがずっと描かれていますけれども、そういうものを所蔵していて、展示にも使ったことがあるのですが、どこでも当然こういった警備というときには図面を描いて、どこにどういう施設をつかって、どういう配置をする。恐らく今の警察もやっているのだろうと思いますけれども、そういう絵を残していくという、警備図というのでしょうか、恐らくそういう一連の資料が本当はあるはずですので、そういったジャンルのものの一つとして見ても、なかなか興味深いものだろうと思います。

関東大震災のコレクションも非常に膨大なコレクションで、インパクトの強い資料で、非常に興味深く拝見しました。言うまでもなく、震災というのは過去の問題ではなくて、今でも起こり続けているし、いつ関東大震災がまた来るかがわからないということです。現代的な関心も非常に高く、こういうものを収集する意味は大変大きいと思います。

当館でも震災については扱ったことがあって、一つの研究の対象にもしておりますし、関東大震災についても朝鮮人虐殺の問題を初めとした展示を行っておりますけれども、江戸、東京という現場で起こったことの資料を現場で収集して、まさに江戸東京博は関東大震災が非常に大きく語り継がれる場所でありますから、そういったところで展示していくと、現地、現場でこれを行うという意味は非常に大きいものがあるだろうと思います。

先ほどの御説明でも震災についての特別展を行う計画があるということでしたけれども、これはぜひ実現していただいて、震災について一体どういうことが起こって、それにどういうふうに対処したのかということまでぜひ総合的に、関東大震災を東京の事例としてきちんと描いていただくというのは、非常に重要な博物館の役割であろうと思います。

研究的にも、恐らく叙述として言われていることだけではなくて、例えば先ほどもお話の中で給与券というものがあって、今は出ていなかったのですが、どうも引換証のようなものを配って、毛布ですとか、綿入れですとか、敷布団とか、いろいろな物を配給していたようなのですが、そういったことの実態というのもまさに今日の被災者の救援と重なってくる問題ですが、実態として、誰がどんなふうに行っていたのだということはま

だまだわかっていないことが多いと思うのですけれども、こういった物の資料から逆にいろいろなことがわかってくるということがあると思いますので、ぜひこれは収集して、研究、展示に役立てていただくのがよいと思いました。

ついでに言いますと、当時本当に身近にあったビラとかチラシとか、こういうものを集めるコレクション魂というのも大変すばらしいものがあると今日思うのですけれども、逆に当然今我々の身近にあるものを残していく。生活をアーカイブするという形でもいいかなと思うのですけれども、そういったことが博物館の持っている非常に重要な使命なのだなということを改めて思い起こさせる資料ですので、そういったいろいろな意味で貴重なコレクションではないかと思いました。

以上です。

大口委員長：ありがとうございました

それでは、武田先生、お願いします。

武田委員：いずれも貴重な資料で、江戸博でコレクションなさることについては、大変価値があると思われま

す。閑院宮の浮線菊紋の漆器ですが、模様などは丁寧に描かれていて、来歴も明確です。それと和宮の所用品は箱書きもしっかりしておりますし、江戸博の役目として、このような漆工品を所蔵していく対象品とするのは非常によいことと思われま

す。ただ、前者の閑院宮のものは、少々使用痕が気になり、収蔵後に手を入れて展示、保存に供したほうがよろしいのではないかなと感じました。塗膜表面が浮き上がっているのではないですが、皿の底に傷が認められましたので、その辺がちょっと気がかりになったところ

です。和宮の漆工品は、宗家に伝わっていたものということで、貴重な資料といえます。徳川記念財団が立ち上がって15年と聞いております。宗家関係の漆工品もまだその全容はまとめて整理されていないようなので、そういう意味では、来歴がしっかりしたものをここで収集しておくことは非常に意義のあることだと思われま

す。関東大震災の資料ですが、本当に状態がよくて、大変驚いたというのが正直な話です。このようなパンフレットとか絵はがき、ビラというものは残っていても余り状態がよくなくて、資料の修復対象によくなるものです。それが保存良好な状態で幅広く系統的に集められています。日常に使う何気ないものは、大口先生もおっしゃっていらしたように本当に残りにくい。それが系統的に何百点も1人の方が集められた。その経緯も大体わかるということで、これらの資料は本当に得がたいものだと思います。

「震災哀歌上野の巻」のパンフレットが何枚か展示してあったのですが、あのような資料は折ったりするとすぐだめになる紙質ですので、それがきれいに残っているのは非常に貴重だと思われま

す。今、陸前高田の被災資料の保存処理に携わっていて、本学の博物館で展示を2回計画いたしました。その折に、防災や震災関係の今までの記録を探しましたが、なかなか手に入

らなかった。そういう意味でも、この江戸博で関連資料を収蔵してくださって、全国の博物館が利活用できれば、それは大変意義のあることではないかと思われま

す。内容をみますと、大衆に対してどのように働きかけたか、また、大衆の動きを伝える新聞の切り抜きなども系統的にあつたり、全てが非常に興味深い内容です。そういう意味では、これから震災関係の第一級の資料となると思われま

す。

大口委員長：ありがとうございました。

中村委員：皆様御指摘のように今回も興味深い資料が収集されていると思いますが、中でも「関東大震災コレクション」はよくぞ集めてくださった、よくぞ江戸博に寄贈いただいたと思えた資料でした。ただ、できま

したら、コレクターの方がどのような方であったのか、被災者の方であったのか、震災へのどのような思いから収集なさったのかなど、コレクターの方についての情報がありますと、コレクションがより厚みあるものになるかと思

いました。

また、名称も「震災に関わる資料のコレクション」ですので、もう少し検討していただ

けましたらと思いました。
大口委員長：ありがとうございました。皆様から御感想、御意見をいただきました。まだ多少時間がありますが、皆様が一巡したところでさらに補足なり、ほかの先生の御意見に対する御意見とかがあれば伺いますけれども、いかがでしょうか。

特になければ、皆さん、収集した候補については大体御賛同があったと思うのですが、改めて伺います。きょうの資料について、本委員会として、収集を承認するかどうか

が

（「異議なし」と声あり）

大口委員長：では、委員の皆さんの御賛同を得たということで、収集を承認することに決定いたしました。

これをもちまして、審議を終了いたします。

藤生文化施設担当課長：大口委員長、ありがとうございました。

本日の資料収集部会の議事録につきまして、冒頭にて説明させていただきましたが、改めて申し上げます。当部会の議事録は資料収集決定後、公開を予定していますので、支障のある内容がないかを事前に確認させていただきますのでよろしくお願

いいたします。

なお、第2回の資料収蔵委員会についてですが、来年1月29日火曜日、午前10時から、場所はこの会議室で開催させていただきます。正式な通知文書は後日発送させていただきますので、どうぞよろしくお願

いいたします。

皆様、どうもありがとうございました。

午前11時44分閉会

以上